日本忍法伝

第19回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第15章
大化改新

（一）

風のように弓月は走った。手にしっかりと国記をにぎって。燃えさかる蘇我の邸から一散にここ飛鳥川のほとりまで、弓月はまるで憑かれたもののようにその書物を抱きしめて走っていたのだ。「国記」これさえ読めば、自分の出生の謎も、大和朝廷の謎も、すべてが明白になる。そしてあの妙なる調べで鳴りひびく銅鐸の謎も……。

弓月は走った。走りつつ、弓月の耳は、耳元で鳴る風の音の中に、ふと赤児の泣き声をとらえていた。その声は、なぜか弓月の足をひきとめた。無心に泣く赤児の声に何か訴えるものがあったのだ。弓月は足をとめて、あたりを見まわした。そして、弓月は草の間にうずくまる女と、その女の前にうずたかく盛られた土の小山をみつけた。

弓月はしずかにその方へ歩んだ。赤児を抱く女がおびえたような目で弓月をみた。そのとき、弓月の口から軽いおどろきの声がもれた。その女は、夢にも忘れたことのない、あの玉櫛だったのだ！

「玉櫛」思わず叫んで二、三歩近よる。

「弓月！」だがその玉櫛のことばはつめたかった。「弓月！　無情なひと……」ハラリと、玉櫛の目から涙が散った。

「無情……？」

「そう、あなたは人の心の暖かみを持たぬ男です」

「それは、なぜ、玉櫛」

「この墓は――」玉櫛は目の前の盛り土を見た。そして風に散るような声で言った。「この墓は若菜さんの墓……」

「な、なにっ」

「そして、この子は、あなたの子ども……」

玉櫛の手の中の赤児がそのときまた泣いた。

「若菜が死んだ……そしてこれがおれの子……」

弓月はよろめいた。いつも涙をうかべた若菜の顔が心をよぎった。そういえば、飛騨の山中で出会って以来、若菜の目から涙の絶えたことはなかった。みんな、おれが悪いのだ。

このおれが……、心で玉櫛を愛しつつ、おれはからだでは若菜を抱いた。そしておれの子が……。許してくれ！　弓月は盛土の前にガバと身をなげると、土にひたいをつけて泣いた。

　かかえていた「国記」が風にあおられてパラパラとめくれた。それはすべて白い紙。いのちがけで蘇我の屋敷から持ち出して来た「国記」は繰る頁、繰る頁、すべて白い、真白い紙のみであったのだ――。

「あんたなんか、大嫌い！」

　いつの間にか額田王も玉櫛の横に坐って弓月をにらみつけていた。

「弓月……」しずかに、感情をおさえるように玉櫛が言った。

「この子、若菜さんがいのちをかけてうみおとしたこの子は、わたしが育てます」

「まってくれ、玉櫛！」

「来ないで！　あなたの顔は、いま見たくありません。いま、これ以上！」

「そう、あんたなんか大嫌いよ。この子はわたしたちが大切にそだてるわ」

額田王が真似をする。そして玉櫛の前に立って歩き出した。

「いこう、私の家へ……」

　そのときだった。弓月は、はるか草原の彼方から土けむりをあげて近づく一団の騎馬隊を見つけた。その先頭を走る若者の背にはためく白い布！

「白布だ！」

「えっ」

　一瞬、玉櫛はおびえたように弓月の方をみた。弓月はさっと玉櫛と額田王のそばへ走りよると、落ちていた「国記」をかかえて身がまえた。弓月の心にはじめて絶望感がわいた。

　自分ひとりなら何とかきりぬけるが、赤児を抱いた玉櫛とまだ小さい額田王――破れるのか白布に……くそっ。弓月はそれでも腰の剣を力一杯にぬきはなった。

　どどっ、大地をふるわせて能登軍団の騎馬隊は迫った。そして、能登軍団がいつもするように、しばらく弓月たちをとりまいてぐるぐるそのまわりを輪になって走りまわったが、やがて、ピタリととまった。

　白布の馬が一頭だけ、ゆっくりと弓月の前へすすんだ。

「久しぶりだったな、弓月。能登以来だ」

「うむ」

「能登から諏訪へ、スメラミコトの命でおもむいたお前が、いつから、われわれを裏切ったのだ！」

「……」

「ハハハ、答えをきこうとも思わぬが、弓月、その手にある国記をかえせ！」

「いやだといったら」

「玉櫛と、そこの小娘を殺す」

「なにっ。玉櫛はお前の許婚者ではないのか」

「その通り。しかし所詮は出雲族の娘。国記とのひきかえなら安い命だ！」

「くそっ、白布」

「どうだ、弓月」

「白布、よし、国記は渡そう。その代わり、二度と玉櫛には手を出さぬと誓うか」

「わからぬ」
「卑怯者！」
「ワハハハハ、卑怯者か、よかろう。遠く蒙古の野に起って、朝鮮を治め、九州を席巻し、そして大和に朝廷をつくった我ら騎馬民族、時には卑怯者にも、裏切り者にもなるわ。ワハハハハ」
「渡すぞ！」
パッと「国記」を白布の手に投げ与えると、
「こい！」
弓月は玉櫛の手をひいて歩き出した。額田王もついてくる。
「本当ならば、このままお前ら三人を討つところだが……まァ、能登での友情に免じて許してやる。しかし、どこにいても、いつか必ずさがしあてるぞ」
かちほこったような白布の笑いの中を、弓月は玉櫛と額田王の手をひいて去っていく。
あれほど恋いこがれた玉櫛にめぐりあったとき、おれはその玉櫛に糾弾される身となっていた。あれほど闘志をもやした白布と出会ったとき、おれは負け犬のように尻尾をまいてにげていく。くそっ、いつか、必ず、こちらこそ……そのときまた弓月は耳の奥でシャランシャランと鳴りひびく銅鐸の音をきいていた。

（二）

——天は覆ひ地は載せ、帝道唯一なり。而るを末代澆薄ひて、君臣序を失へり。皇天手を我に仮し、暴逆を誅し殄てり。今共に心の血を瀝みつ。而して今より以後、君は二つの政無く、臣は朝に弐くこと無し。若しこの盟に弐かば、天災し地妖し、鬼誅し人伐ち、皎きこと日月の如し——。
法興寺槻の木の下、群臣を前に中大兄はとうとうと詠み上げていった。帝道唯一——つまり天皇絶対主義の理念が、わが国歴史上はじめてここに明きらかにされたのである。
時に西暦六四五年六月、中大兄二十歳。皇極天皇はクーデターと共に皇位を退き、ここに年号は大化と改められる。
槻の木の下での盟を終え、群臣が散りはじめたときだ。中大兄は、またあのいやなフワーッとした口臭をかいだ。中臣の鎌足が、中大兄の耳に口をよせたのだ。
「皇子、よういならぬことをききました」
「何か」
「皇太子・古人皇子のことでございます」
「古人皇子がどうしたのか」
「あなたさまが蘇我入鹿を討ちさなれたのをみて、古人皇子は側近のものに『韓人、鞍作臣を殺しつ。我心いたし』とのたもうたそうな」
「なにっ。『韓人、鞍作臣を殺しつ』と！」
瞬間、中大兄の顔色がさっとかわった。鞍作臣とは蘇我入鹿のことだ。されば韓人、つまり朝鮮人とは誰をさすのか。いうまでもない、中大兄をさしている。
「バカ者めが！」
中大兄ははき出すように言った。
「自分をあとおししてくれた蘇我一族が滅ぼされて、古人皇子は気が狂ったのか」
「ウヒヒヒ、気が狂ったのではのうて、つい気が動転して本当のことを申されたのでおじゃりましょう」

「だまれ！ 帝道唯一、この日本を支配する大和朝廷が韓人（朝鮮人）だなどと、今後何人なりともいうことは許さん！ 中臣鎌足、我らのこのたびの闘いは、そうした出雲族を中心とする不満分子を一掃するための乱ではなかったのか！」

「それはわかっておりまする。なれど、皇太子の古人皇子みずからがそのようにのたもうては、困ったことでおじゃりまするのう。皇太子といえば、次の天皇になるべきお方。天皇自身が、韓人じゃというておるということになりましょうが」

「はっきりといえ鎌足！ わかっておる。古人皇子は天皇の位にはつけん！」

「それでは、どなた様を……」

「うむ」

中大兄はちょっと考えこんで言った。

「軽ノ皇子はどうかな」

「ウヒヒヒヒ、軽ノ皇子、賛成でおじゃります。あの方はいささかものの考えがにぶいとかきいておりまするが、そうなれば皇子、あとは皇子と私の思いのままで……」

「うるさい」

先へ先へと事態をよんで手をうってくる中臣鎌足、中大兄はいまはこいつが自分にはなくてはならぬ味方だとはわかっていながら、この男のずるそうな目と、あのいやな口臭にはへきえきしている。

「鎌足！ 古人皇子を法興寺の御堂につれて参れ」

「へえ！」

小柄な鎌足はまりのようにかけていく。

そこへ、ドドッと、馬蹄の音をひびかせて白布と能登軍団の一隊が入ってきた。

「白布！ ここは法興寺の境内ぞ、馬をおりてはどうかな、そこの家来共も！」

中大兄は一喝する。能登軍団の兵士たちはあわてて馬をおりようとした。

「下馬は許さん！」白布がどなった。

「皇子、元々騎馬民族の我ら、どこであろうと馬にのっていてなぜわるい」

「白布、今日は我らがこの日本で、しっかりと根をおろすための大切な日だ。今日からは、そうやたらに騎馬民族、騎馬民族ということは許さんぞ！」

「表面だけつくろうてみて何になる。皇子、それ、あれほどほしがっていた『国記』だ。それをよめば一目瞭然というものだろうが」

白布はそういって馬上から中大兄に「国記」をほうってよこした。

中大兄はパラパラとめくった。そして大声で笑い出した。

「何がおかしい」

「みろ、白布、この書物には何もかいてない。ただの白紙だ。ワハハハハ。ようし、よし、これから、わしが、わしの考えたとおりの歴史を、ここにかきとどめてやるぞ！　ワハハハハハ」

「天皇記」はすでに燃えた。いや中大兄が焼いたのだ。そして白紙の「国記」をにぎって中大兄は法興寺の庭一杯にひびきわたるような声でわらった。

（三）

ガシャリ、白木の床に、宝石をちりばめた剣が重々しくおかれた。剣をおいたのは中大兄。その前にまっさおになってすわっているのは古人皇子だ。

「許せ、中大兄。騒ぎにおどろいて、思わず口ばしったのだ」

「許せません」

「なれば、わたしがとりけしてあるく。いいや、あのことばをきいた側近の者はすべて斬りすてる」

「いや、それでも、一度口から出たことばは二度と消すわけには行きません」

「どうしろというのだ、わたしに」

中大兄は、だまってスラリと剣をぬいた。初夏の光に、剣はキラリと不気味に光った。

「き、きるというのか、わたしを」

「古人皇子、かりにも、あなたは皇子、わたしの手はくだせぬ。次の天皇の位は軽ノ皇子にゆずると記し、みずからの手で、みずからのいのちを断ちなさい――どうです！」

中大兄は光る剣の刃をぐっと古人皇子につきつけた。

「ゆ、許してくれ。わしが、わたしが軽率であった」

古人皇子は、ふるえる手で、筆をとった。そして天皇の位は軽ノ皇子にゆずると書いた。かきおわって、古人皇子はすがるような目で中大兄をみつめた。しかし中大兄の目は動かなかった。

一瞬、古人皇子はパッと中大兄の手から剣をとると、やにわに、その剣で自分の頭の髪をバサリと切りおとした。

「これで許してくれ、わたしは今日かぎり出家して仏門に入り、吉野の山にこもる。二度とふたたび飛鳥へは姿をみせぬ！」

「臆病者！」

いきなり中大兄は立ち上がると古人皇子の肩を力一杯蹴った。古人皇子は後へのけぞり倒れた。

「それほど命が惜しいのか！　よし、では今いったとおり、吉野山へこもり、二度とわしの前へ、いやすべての人々の前へは現われるな！」

言いすてると中大兄はズカズカと表へ出ていった。陽光の中に、法興寺の庭をうずめつくした能登軍団の騎馬の群れが、一斉にいないて中大兄を迎えた。

「つづけ者ども！　新天皇の誕生ぞ！」

中大兄は吼えた。ワアーッという喚声と共にドドッと騎馬の群は大地をけった。その音の中で、古人皇子は、いま切りおとした自らの髪をつかんで、大粒の涙を法興寺本堂の床ににじませていた。

「兄上のしうち、お恨みであろう」

若いしずかな声がきこえた。古人皇子はふと顔を上げた。そこに中大兄の弟大海人皇子が立っていた。

「兄を許して下さい」

大海人はそういうと古人皇子の前にきちんと坐って頭をさげた。

「わたしも、あの兄のやり方にはとてもついてはいけそうもありません。特に、兄が、この日本に騎馬民族の征服王朝を完成させるため、出雲族の人たちを弾圧している姿は、わたしには正視することはできない

のです」

「いわないで下さい。大海人皇子、これもすべて私の軽率さから出たこと、ねがわくばあなたもわたしと同じ轍をふまれないようにということです」

古人皇子はよろよろと立ち上がった。

「古人皇子は今日で死んだも同然。さようなら大海人皇子、おしあわせに……」

と、そのときだった。人影なき法興寺の庭から、かわいい少女のうたごえが、それも、まるで忍ぶようなうたごえがきこえて来たのである。

「八雲たつ
出雲白雲
海にたつ
七重地の雲
八重天の雲」

「額田王」

大海人皇子が思わず叫んだ。

「どこにいるのだ、額田王」

大海人は、あの額田王のくりくりとした瞳に、いま自分が完全に魅せられているのを知っている。

「出てこい、額田王」

その声に、答えるかのように、サアーッと天井から一つの影が降った。影は、古人皇子の前にうずくまっていった。

「吉野山へお伴つかまつります。そして、あなたさまのおことばの意味をとくとうけたまわりたい――『韓人、鞍作臣を殺しつ、我心痛し』の意味を――」

古人皇子はゾクリと身をふるわせた。

影は顔を上げた。そこに弓月の顔があった。

（四）

軽ノ皇子は孝徳天皇となり、中大兄は皇子となった。孝徳は事実上、中大兄の人形の如き天皇であった。中大兄の大化の改新の政策は着々と進んだ。

第一、東国へ国司を派遣し、全人民の戸籍と田の面積の調整を命じた。

第二、大和の六県に使者をつかわし、造籍校田を命じた。

第三、男女の法の制定――子どもの親権の問題をきめた。

第四、鐘匱の制の実施。

第五、僧侶、寺院を統制した。

そしてこの年の末、みやこは飛鳥から難波にうつされ、さらに翌年、改新の大綱が発表された。

第一、公地・公民の原理。第二、行政・軍事組織の制定。第三、戸籍・計帳・班田収授の法の立法。第四、新税制の確立。

すべて朝廷中心の中央集権化をめざした法令である。が、それは同時に、ふたたび各地にちらばった出雲族に対し、その息の根をとめようとする法令でもあったのだ。

（つづく）